

悠久の京を訪ねて Part V Vol.1



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

PartVでは、5回シリーズで8月16日から開催の第29回『小さな展覧会』より主な遺跡や遺物について紹介します。

中世から今に続く島畑の風景 一下水主遺跡一

下水主遺跡



■木津川流域の島畑

平成24年度から当調査研究センターが行っている、新名神高速道路建設に伴う城陽市^{しもみずし}下水主遺跡の発掘調査で中世の島畑^{しま}がみつかっています。

木津川流域は愛知県一宮市とともに島畑が良好に残されている地域として有名です。文化庁は『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』に関わる文化的景観の一つとして、城陽市に所在する「木津川流域の島畑」を掲げています。「島畑」は、水田の中に一段高く畑を造ったもので、畑が水田に囲まれて島のようにみえることからこのように呼ばれています。島畑は全国各地の水位の低い扇状地・氾濫原



発掘調査で見つかった島畑

といった場所で造られていたようです。水は地面の低いところに集まり流れるため、水田を造る時には、地面の低い部分を平らにならして造成していきます。こ

の時、余分な土を周囲に盛り上げて、畑として利用したのが島畑です。

■島畑の調査

発掘調査で見つかった島畑の大きさは、幅8~15m、長さ50~100mです。畑の耕作面は周囲より0.6~0.8m程度の高さがあったようです。島畑と島畑の間の窪地から出土した土器から、島畑は13世紀前半に造られ、現代まで利用されていたことがわかりました。

興味深いことに、島畑は土盛りが繰り返されただけで、平面形は造られた当初のまま変わっていませんでした。13世紀前半の島畑が造成された時点の区画や配置が、そのまま現代の区画にまで受け継がれているのです。鎌倉時代から今日まで続く島畑の景観から、農耕に適さないところを工夫して田畑に変えてきた先人の知恵を感じとることができるでしょう。



島畑の調査の様子